

現代における紙とその魅力についての研究

A study of modern paper and its appeal

サレジオ工業高等専門学校 デザイン学科 生活文化マネジメント研究室
根岸 千暉 指導教員 氏家 和彦

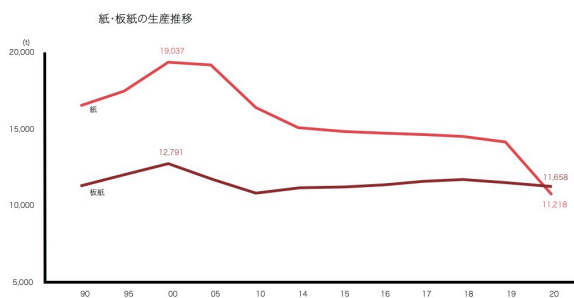
キーワード：紙、現代、触る

1. 研究目的

電子化が進み必要性が薄れてきた紙媒体の製品。広告やカード類のほか、教材などにもこの波が及んでいる。この流れの中で、今必要とされている紙とはどのようなものだろうか。現代で価値を持つ「新しい紙のあり方」を求め、その魅力を伝える。

2. 調査内容

技術の進歩により、紙でなくても良い、紙でない方が便利だという製品が増えたことで、紙、板紙の需要・生産は右肩下がりが現状である。(図1)このまま紙文化は衰退し、紙の出番は無くなって行ってしまうのではないかと危惧する声も多くみられた。

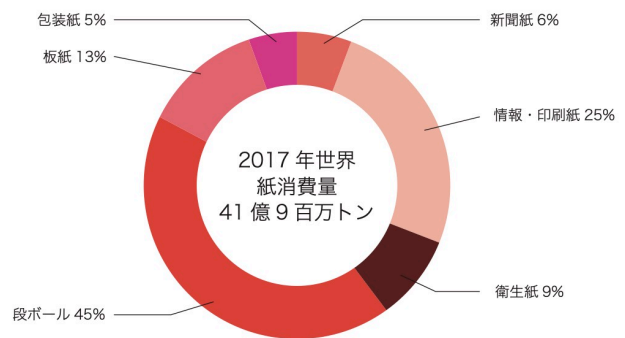


(図1) 日本製紙連合会/生産推移・紙、板紙

電子化された製品と紙媒体の製品の最も大きな違いとして挙げられたのは「実物が存在し、実際に触ることができる」ということであった。普段から手でさまざまなものを触って知覚している我々人間にとってこの点は非常に大きい。手に持って実際に触ることができるということが紙文化を推し進めるために重要なポイントとなる。

今回、紙が多く利用されているものの中で書籍

に着目した。書籍は何枚もの紙が綴じられてつくられており、手で開いてめくりながら読むため、紙の魅力を伝えるためにはとても都合が良い製品だと言えるだろう。紙消費量内訳の中でも新聞や情報、印刷用途の割合は多く、広く周知する目的でも期待が持てる。(図2)



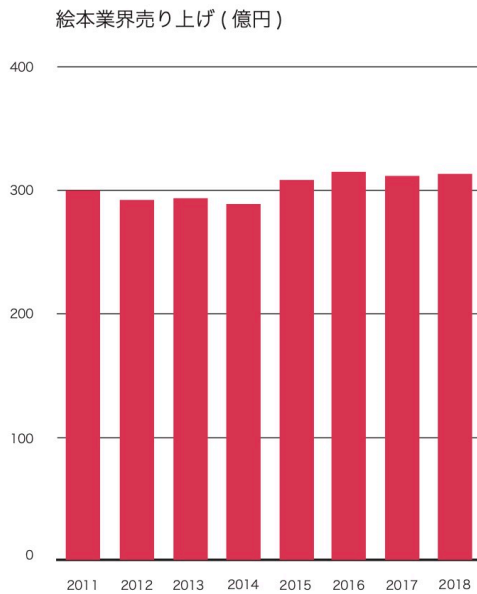
(図2) 世界消費紙量内訳 2017

3. コンセプト・アイデア展開

調査の内容を踏まえ、「新しい紙のあり方」として、手で持ち、触ることに力を入れた書籍を作成することにした。既存の書籍の演出を、紙を用いて作り替え、より効果的な演出方法を模索する。(図5)コンセプトは「感じる本」とする。ものが存在することによってのみ感じることの出来る触覚や紙同士の重なり、光の当たり具合等を用いて書籍の内容をより感覚的に伝える挑戦である。

まずは書籍の中でもどのような内容のものを取り扱うかであるが、写真や絵が大きく掲載されたものが直感的に理解出来、紙の効果に集中出来るのではないかと考えた。また、絵本は少しずつ衰退している書籍、出版産業の中でも売り上げを守っ

ている一定の読者を持つジャンルであり、より多くの人にこの提案をみてもらうためにもよいと考えられるからである。^(図3)近年では大人向けの絵本も作られるようになり、多様な読者を持っていると言える。

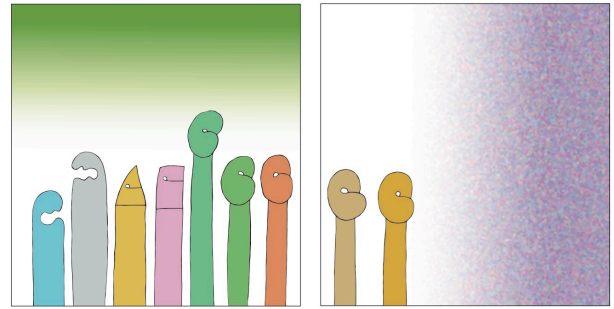


(図3)国内絵本売り上げ

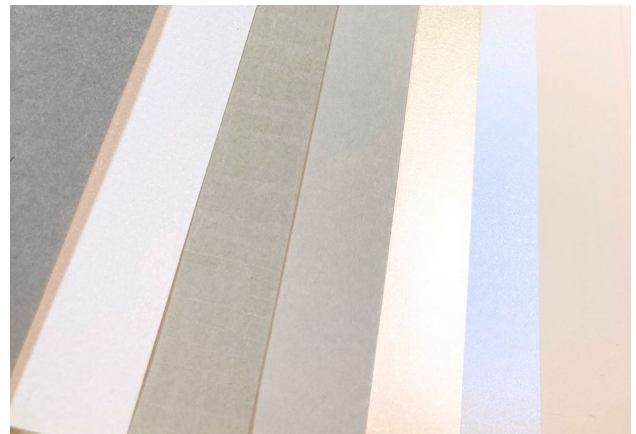
ここでは絵が大きく描かれた絵本を取り扱うこととし、候補の中から選出を行った。すでに多くの人々が確定した印象を持っているものや複雑な内容のものは避け、より単純なものを求めた。結果として子供向けの絵本 山下洋輔著「もけらもけら」^(図4)が選出された。これに対し、和紙、フィルム、再生紙、複合素材等の特殊紙を用いて演出を加えていく。

4. 最終提案・課題

現段階での最終提案としては絵本「もけらもけら」一冊を考えている。中身だけでなく表紙やカバーにも変更を加え、書籍として形を整えたものになる。絵本「もけらもけら」はひと見開きで一つの内容が描かれているため、ひと見開きごとに使用されている紙の名称や特徴などが小さく解説される「紙のカタログ」のような仕様を目指す。絵本として楽しみながら紙というものに親しんでもらう目的である。この研究自体に特定のターゲットは定めていないが、最終提案物となる絵本は、大人向け絵本としての完成を予定している。



(図4)「もけらもけら」内部イラスト



(図5)特殊紙 例

6. 参考文献

- 1) 日本製紙連合会 / 生産推移・紙、板紙 2021/8/23
<https://www.jpap.gr.jp/states/paper/index.html>
- 2) 出版指標年報 2019 年度版